法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-05-09

ジェンドリンからの手紙とそこから得られた応答的秩序

SUETAKE, Yasuhiro / 末武, 康弘

(出版者 / Publisher)
法政大学現代福祉学部現代福祉研究編集委員会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
The Bulletin of the Faculty of Social Policy and Aoministration : Reviewing research and practice for human and social well-being / 現代福祉研究
(巻 / Volume)
9
(開始ページ / Start Page)
99
(終了ページ / End Page)
110
(発行年 / Year)
2009-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00005686

ジェンドリンからの手紙とそこから得られた応答的秩序

末　武　康　弘

１．はじめに

この小論は、2008年春にニューヨークで開催されたジェンドリン（Gendlin, Eugene T. 1926～、アメリカの哲学者・心理療法家）のワークショップへの参加体験と、その翌日にジェンドリンの自宅に招かれた際のディスカッション、そしてその一週間後に彼から送られてきた手紙の内容に関する、筆者の連想的な考察および筆者のなかに形成された応答的秩序（responsive order）の描写である。

２．ワークショップとジェンドリン宅でのディスカッション

2008年の年明けに、研究仲間の諸富祥彦氏（明治大学）から「この春にニューヨークでジェンドリンのワークショップが開かれるらしい」というニュースをもらった。カール・ロジャーズ（Rogers, Carl R. 1902～1987）が創始したクライアント中心療法（client-centered therapy）を体験的心理療法（experiential psychotherapy）そしてフォーカシング指向心理療法（focusing-oriented psychotherapy）（Gendlin, 1996）へと発展させた貢献者として、また心理援助スキルとしてのフォーカシング（Gendlin, 1981）の開発者・指導者として世界的に著名なジェンドリンは、すでに高齢で最近腸閉塞の手術を受けたとも聞いていた。今後こういう機会はそう何回もないかもしれないという気持ちもあって、今回のワークショップには何としても参加したいと思った。

そこで数年前から開かれている研究会「ジェンドリン哲学カフェ」の主要メンバーで誘い合わせ、諸富祥彦（前出）、村里忠之（帝京平成大学）、得丸智子（日本女子体育大学）、大竹直子（千葉大学カウンセラー、法政大学兼任講師）、山田妙慧（立正福祉会家庭児童相談室）の各氏と私の6名がニューヨークでのワークショップに参加した。

2008年3月29日にマンハッタン中心部のブラッドセンターで開催されたワークショップ、“Some Philosophical Concepts That Can Illuminate The Role Of The Implicit In Psychotherapy（暗在的なものが心理療法において果たす役割を照射しうるいくつかの哲学的概念）”はとても印象的な

もので、ジェンドリンが彼のプロセスモデル哲学（Gendlin, 1997a）をベースにして心理療法の問題を語ってくれたことや、何と彼自身がセラピー面接のデモンストレーションを実演してくれたことなど、とても実り豊かな1日だった。(なおこのワークショップは、企画者のナダ・ルー（Nada Lou）によってDVDが製作されている。http://www.nadalou.com/video_philosophy.htm)

そして、それにもまして今回のニューヨーク滞在で最も充実した、しかも感動的だったひと時は、ワークショップの翌日（3月30日）、ジェンドリンとメアリー・ヘンドリックス（Mary Hendricks）夫妻にニューヨーク郊外のご自宅へ招いていただいて、そこで哲学や心理療法に関する質問とディスカッションを行えたことだった。

メアリーが教えてくれたのだが、ジェンドリンが私たちを招いてくれたのは、私たちが彼の哲学的主著『プロセスモデル（*A Process Model*）』(Gendlin, 1997a）に関心を持っていて、東京で研究会を開いていることを知っていたから、ということだった。

私のなかには『プロセスモデル』の内容を中心に、ジェンドリンに尋ねてみたいことや話してみたいことがたくさんあった。しかし、時間の制約と（訪問は2時間という約束だった)、今回は通訳者を同行できなかったので言葉の制約もあって、伝えたいことや聞きたかったことの一部しか言語化できなかった。

それでも、直接に話を伺うことができた成果は大きく、特に『プロセスモデル』のキーワードの一つである“leafing”の意味が確認できたことや、ジェンドリンの進化についての考えがわかったことなど、これまで私のなかでいまひとつ曖昧だったいくつかの点を明確にすることができた。

前者の“leafing”（リーフィング。定訳はまだないが、日本語に置き換えるとしたら「葉状化」ないしは「葉態化」などと言えようか）とは、生命プロセスのなかで刻々と生起している、ほとんど同じであるが、しかしまったく同じではない現象の連続（たとえば、心拍や呼吸、まばたきといった身体的なものから、感情やイメージ、表象などの心理的・認知的なものを含む）を指し示すジェンドリンの述語だが、2006年10月にアン・ワイザー・コーネル（Ann Weiser Cornell）が来日して開かれたワークショップで、彼女が“leafing”を「木々の葉が風にそよぐ」イメージで語っていたのに対して、私は「次々と芽吹く葉々」のイメージとしてとらえていた違いを、ジェンドリンに確認してみたかったのである。ジェンドリンは明確に、“leafing”は「芽吹き（leaves budding)」のイメージから概念化したものである、と答えてくれた。

また進化の問題については、『プロセスモデル』では、生物や人間の進化は突然変異や自然淘汰によって起きるのではなく、あらゆる個体のなかで瞬間瞬間に生起している個別の現象が総体的に進化を引き起こすのだ、という考えが述べられているが、ほんとうにジェンドリンがそのように考えているのかを確かめてみたかった。彼の答えはこれについてもきわめて明確で、「もちろん、そうだ」

と言った後に、「そうではない例があれば（つまり、一つの個体の突然変異だけで進化が生じ、その他の個体が自然淘汰されてしまうような具体例を）、見せてもらいたい」と語っていた。

しかし、こうした議論にもまして私がジェンドリンに尋ねてみたかったのは、『プロセスモデル』における“stoppage”（「停止」あるいは「休止」）の概念をめぐるいくつかの重要な問題についてだったのだが、それは、次のような内容からなる複雑なものであった。生命体に進化をもたらすのはどのような「停止」においてなのか？ 「停止」と「構造拘束的（structure-bound）」（Gendlin、1964）な体験との異同は？ 心理療法における「治療的停止（therapeutic stoppage）」――これは私の造語である――の重要性は？ 等々。これらについては、十分な時間を割いて言葉にすることができなかった。

そこで私は、2007年7月にイギリスのイーストアングリア大学で開催された Process Model Colloquium で発表した私のプレゼンテーションの原稿をジェンドリンに手渡して、「よかったらこれを読んでほしい」と伝えた。その原稿のなかには、“stoppage”に関わる上記の問題についての私の考えの一部を記述していたからである。(注1)

すると、その一週間後、帰国した私のもとに電子メールの添付ファイルで、ジェンドリンから次のような手紙が届いた。

以下は、その手紙の内容と、私の連想的な考察および私のなかに形成された応答的秩序（Gendlin, 1997b）――何か（ここではジェンドリン）からの応答によって、生命体（ここでは私）のなかに生起する新しい秩序のこと――である。

３．ジェンドリンからの手紙とそこから得られた応答的秩序

Dear Professor Suetake,

Please let me check whether I understood you correctly.

拝啓　末武先生

私があなたのことを正確に理解したのか確認させてください。

――ロジャーズの系譜を受け継ぐ心理療法家ジェンドリンならではの問いかけである。このように問いかけられると、私の注意は必然的に、ジェンドリンが語りかけようとすることと私自身の思考そしてフェルトセンスが交差するところへと向かう。そしてそこに、応答的秩序が形成され得るスペースが生じる（願わくば私も、一人ひとりのクライアントにつねにこのように問いかけたいと思う）。――

I think you said that you are working with “very pathological” people.　I spent five years working in a hospital, and have also worked with such people since then.　So I know how difficult this work is and I value it very highly.

私は、あなたが“かなり病理的な”人々とかかわっていることを話していたと思います。私も病院で5年間を費やし、それ以来そうした人々とかかわってきました。なので、私はそのかかわりがいかに困難であるかを知っていますし、そのことにとても高い価値を置いています。

――ジェンドリンが「私も病院で5年間を費やし」と書いているのは、ロジャーズらが計画し、ジェンドリンがその主任研究員を務めたクライアント中心療法の統合失調症患者への適用プロジェクト（いわゆるウィスコンシンプロジェクト、1957～1962年に実施された）（Rogers, et al., 1967）での経験を指すものであろう。私は当時のジェンドリンの仕事（たとえば、統合失調症患者との心理療法の手続き（Gendlin, 1962b）や、セラピストの自己表明性と言語下のコミュニケーションの重要性（Gendlin, 1963）等）は注目に値するものだと考えており、またその後の『フォーカシング指向心理療法』（Gendlin, 1996）などの著作のなかにも、いわゆる困難ケースや重症ケースにおける対応の手がかりや留意点がちりばめられている。私はこのような側面におけるジェンドリンの仕事に対しても、深い尊敬の念を抱いてきた。――

You said that when a person is in a pathological process, you sometimes say “stop,” putting up your hand and finger, and of course thereby putting your whole person in between this and the next running on.

You said that this is a kind of “stoppage,” and like in the Process Model, this stoppage has possibilities of something new and different coming.

This is a very beautiful thing you are doing, and (if I understood you correctly) I agree that it has the characteristics of a stoppage as in the Process Model.

あなたは、ある人が病理的なプロセスの中にいるときに、あなたの手と指を上げて“ストップ〔ちょっと待ってください〕”と言うことがあると言いましたね。それはもちろん、あなたという人間の全体を、このこと〔病理的なプロセス〕と次に続くことの間に差しはさもうとしてのことでしょう。

あなたは、これはある種の“停止（stoppage）”であり、プロセスモデル〔で私が表明したこと〕と同様に、このような停止には新しい違った何かが訪れる可能性がある、と言っていましたね。

このような、あなたがやっていることはとてもすばらしいことであり、そして（私があなたを正確に理解しているならば)、私はそのことがプロセスモデルで表現した停止の特質を併せ持っていることに同意します。

――私がジェンドリンに伝えようとしたのは、心理療法のなかでクライアントの反復する病理的な行動や思考を「停止」（あるいは「休止」）させることの重要性であり、それを私は「治療的停止（therapeutic stoppage)」という用語で呼びたい、ということであった。しかし、それを説明しようとした際に、日本における座禅や止観といった仏教的伝統や、森田療法や内観療法における不問技法などを例として用いようとしたために、かえって会話が錯綜してしまい、ジェンドリンにうまく伝わらなかったという印象を抱いていた。だが彼には、私がボディランゲージで示した「シーッ」という沈黙を促す（日本的な？）しぐさが印象に残っていたようだ。私は、言語的説明を超えて、私が伝えようとしたことの本質をジェンドリンが正確に把握していたことに喜びを感じると同時に、驚きすら覚えた。――

I would only add that this can succeed because from the time you have worked together the person can feel your care in your saying this “stop.” The person knows you are not saying it because you are impatient or judging or angry, but feels that you are trying to help the person with what the person is up against, struggling with, having to go through.

This can work because the person knows and feels that you are trying to stop the pathological process. You are not trying to stop the person.

そして少し補足させてほしいのですが、このことが有効に働きうるのは、“ストップ”と言うことで、そのときあなたが、あなたにかかわってもらっていると相手が感じられるように働きかけているからなのです。その人は、あなたがイライラしていたり、非難しようとしたり、あるいは怒っているからではなくて、自分が直面し、もがき苦しみ、乗り越えなければならないことに手を差しのべようとして、あなたがそのように言っている、ということを知っているのです。

こうした働きかけは、あなたが病理的なプロセスをストップさせようと試みているということを相手が知り、感じているからこそ有効に働きうるのです。あなたはけっして、その人をストップさせようとしているのではありません。

――たしかにそのとおりである。「治療的停止」とは、たんにクライアントの病理的で反復的な反応を止めさせようとする機械的な技術や介入のことではなく、クライアントがよりその人自身でい

られるようなスペースを内的に形成してもらえるように働きかける、セラピストの全人格的なかかわりであるべきものである。しかし、私がこれまでにうまく援助できなかった、あるいは中断してしまったようなケースにおいて、私がクライアントその人自身のプロセスをストップさせてしまったことも少なからずあったはずである。では「治療的停止」とそうでないものは、どのように違うのだろうか？　そして「治療的停止」はどうすれば有効にもたらされるのだろうか？――

Sometimes talented and sensitive therapists, when they teach or write, omit this essential factor, perhaps because of modesty or because to them it seems obvious. But it is not generally known. And without experience people might not feel this as I could, just seeing you and the way you made the gesture and said “stop.”

時々、才能も感受性も豊かなセラピストが、セラピーについて教えたり書いたりする際に、この本質的な要素を省いてしまって、それに触れないことがあります。おそらくはそれを語ることを遠慮しているのか、あるいはあまりに明白なことだからなのかもしれません。しかしそれ〔この本質的な要素〕は一般に広く知られていることではないのです。人々は体験することがないので、こうしたことを感じることができないでいるのです。つまり、私が〔自分の仕事やプロセスモデルの中で〕感じているようには。またあなたと会って、あなたが“ストップ”と言った時のしぐさや言い方に触れたときに感じたようには。

――ジェンドリンは、心理療法のこの本質的な要素（私が「治療的停止」と呼びたいもの）は、才能も感受性も豊かなセラピストであれば当然知っているはずである、と言いたいようだ。しかし、こうした質の「停止」は、あくまでも経験知や身体知といった類いのものであって、体験や実感によってはじめて知られるものであり、そうした体験がなければその大切さは認識され得ない、ということである。とすれば、「治療的停止」が有効にもたらされる鍵は、その独特の体験や質感をクライアントに豊かに提供することができるか、そしてその人とその体験や味わいを共有することができるかどうかにある、と言えるだろう。――

Then you asked me how the Process Model concept of “stoppage” (implying with new possibilities) relates to the concept of “structure-bound.”

I have been thinking about it since you left.

In the article “Personality Change” this is connected with the concept of “reconstituting,” (when just explicating what is already implicit in the client’s

experiencing is not enough.　Something more from the interaction is needed to reconstitute a missing experiencing process).

それからあなたは私に、プロセスモデルにおける“停止（stoppage)”の概念（新たな可能性を暗在的に含意している）が“構造拘束的（structure-bound)”の概念とどのような関係にあるのか質問しましたね。

私はあなたが帰ってから、そのことについて考えました。

“人格変化の理論”のなかで、構造拘束の概念は“再構成化（reconstituting)”の概念と関係を持っていました（つまり、クライアントの体験過程のなかにすでに暗在しているものを展開するだけでは不十分であるときに、失われている体験過程のプロセス（a missing experiencing process）を再構成するためには相互作用から何かそれ以上のものが生まれる必要がある、と)。

――ジェンドリンが「人格変化の理論」(Gendlin, 1964）で提出した「構造拘束的」の概念は有名である。それは体験過程が推進されない病理的な様式として彼が概念化したものだが、これもある種の「停止」と言えるものである。では構造拘束的で病理的な「停止」と、『プロセスモデル』で言うような「停止」とではどのような違いがあるのだろうか、というのが私の問いかけであった。ジェンドリンの答えは、手紙の続きに述べられているが、その前にここで1点だけ触れておきたいことがある。それは「構造拘束の概念は“再構成化（reconstituting)”の概念と関係を持って」いると彼が書いている点である。たしかに「人格変化の理論」を読み返してみると、「構造拘束的」の概念は、「パーソナルな関係の役割――他者の反応がいかにして個人の体験過程に影響を及ぼすか…」の節のなかで記述されており、「構造拘束的」な体験が他者の反応（応答）によっていかに「再構成化」されることが可能であるかが理論的に述べられている。これまで私たちは、ジェンドリンの「構造拘束的」の概念を、変容困難な病理的体験を指すものとしてリジッドにとらえすぎていたのではないだろうか？　「構造拘束的」な体験とは、他者の反応（応答）によって「再構成化」されることが可能な様式であることを、ジェンドリンは「人格変化の理論」のなかですでに解明しようとしていたのである。――

So now I would say that the Process Model fills in how reconstituting works.　The interaction reconstitutes a missing experiencing process.　A missing experiencing process is a stoppage.　The Process Model explains that a stoppage is not just no-process, rather a constant implying of the process, and not just that formed process but any way that might carry the implying forward.

そこで私はいま、次のように言いたいのです。プロセスモデルでは、いかに再構成化が機能するかを説明しているのだ、と。相互作用は失われている体験過程のプロセスを再構成します。ある失われている体験過程のプロセスが、ある停止です。プロセスモデルでは、ある停止とはプロセスがないことを意味しているのではなく、プロセスのコンスタントな（継続する、不断の）インプライング（暗在的含意）なのです。そしてそれはまだ形作られていませんが、いずれそのインプライング（暗在的含意）は推進され得るものです。

――“implying”（インプライング。これもまだ定訳はないが、私は「暗在的含意」という日本語をあてている）は『プロセスモデル』の重要な根本概念である。“implying”とは、生命体に生起（“occurring”）を引き起こす何かであって、生命現象の基底を指し示そうとする『プロセスモデル』の根源語の一つである。生命体が死んでいないときには、つねにこの“implying”にしたがって生命体は推進される。フォーカシングで言われるフェルトセンスは、人間特有の“implying”のあり様であると言えるだろう。しかしすべての生命体にはフェルトセンスというよりももっと根源的で原初的な生命現象の基底が共通してあるはずで、それを『プロセスモデル』では“implying”と呼んでいる。――

So yes, structure-bound is a kind of stoppage.　The concept of “stoppage” came later and has more concepts in it.

But “structure-bound” says something about pathology, whereas just “stoppage” does not. In the usual stoppage and leafing, each repetition is a little different with freshly-formed detail.　Structure-bound repetitions seem to be the same without any fresh detail, not each repetition “a little different.”　I would argue today that each repetition is a little different but when we are structure-bound we do not move on from the little different. Instead, we go on from the same, and again from the same, and again from the same.　So it may require interaction to stop the structure-bound repetition (means without fresh detail).　Any moment of not going on without fresh detail is already a fresh moment, even if we think it is only the stop, the not-going on.

そうです。構造拘束とはある種の停止です。“停止”の概念は〔私のなかで〕あとからやってきたものであり、そのなかに多くの概念を包み込んでいます。

しかし“構造拘束”は病理について何かを語っており、一方“停止”はそうではありません。通常の停止やリーフィング（leafing）のなかでは、どんな反復も、新鮮に形作られた細部を持っ

た少し違ったものです。構造拘束的な反復は、新鮮な細部を持たない同じようなものに見えますし、“少し違った”反復ではないように見えます。私はいま、次のように論じたいのです。つまり、どんな反復も少し違ったものですが、私たちが構造拘束的であるときには、少し違ったものから動くことができません。その代わり、そこでは私たちは同じものから、また同じものから、また同じものから…動いているのです。なので、そこには構造拘束的な反復（新鮮な細部を持たない）を停止させる相互作用が求められるのでしょう。新鮮な細部を持たないで進行するどんな瞬間も、すでに一つの新鮮な瞬間です。たとえ私たちがそれをたんなる停止であり、進行しないものであると考えたとしてもです。

――ここには、「停止」と「構造拘束的」の概念の異同に関する私の問いかけに対しての、ジェンドリンの答えが明確に述べられている。しかしここにはまた、私の問いかけをはるかに超えた、人間や生命体の本質に関するジェンドリンの深い示唆が表明されている、と私は感じる。特に最後の、「新鮮な細部を持たないで進行するどんな瞬間も、すでに一つの新鮮な瞬間です。たとえ私たちがそれをたんなる停止であり、進行しないものであると考えたとしてもです」という箇所がそうである。これはどういう意味なのだろうか。

私はいま、次のように考える。私たちはたとえば、あらゆる人間の指紋がまったく一致することはないことや、あるいは同じ樹木の葉々の模様が一枚一枚微妙に異なっていること（おそらく“leafing”の概念はそのことをモチーフにして考えられたものだろう）などを知っている。また、自分と骨格や顔つきや声などがまったく同じ人間が、いまの地球上にだけでなく、数十万年もの人類の歴史のなかにもけっして存在しないことを知っている。さらに、自分という一個の個体においても、心拍や呼吸などはほとんど同じことの繰り返しであるが、長いタイムスパンのなかで見ると、幼児期と老年期ではそれらはかなり異なる生起の様式になる、という事実は疑うこともできない。『プロセスモデル』がとらえようとする私たちの生命のプロセスとはどのようなものなのか。それは個々の生命体の“implying”に基づいた、新鮮に形作られた細部を持つ、ほとんど同じであるが少し違ったものの連続によって成り立っているプロセスである。たしかに、個体としての生命体は、様々な病理におかされるし、いつかは死んでしまうものである。しかしそうだとしても、身体が死んでいない間は、生命体はつねにその個体としての独特の様式で生きており、推進されているのである。そのように考えると、いわゆる「構造拘束的」な体験（たとえば妄想や幻覚、常同行動など）は、新鮮な細部を欠いた病理的な体験様式であるし、それだけの反復はその個人の生命プロセスを脆弱化させてしまうだろう。しかしある意味では、そうした「構造拘束的」な体験も、（それが生起しつつも身体は死なないとしたら）その人、その個体固有のプロセスであるという意味では、基本

的に「一つの新鮮な瞬間」であると言うことができる、いや、言わなくてはならないのである。――

You coming in and reaching the person with your “stop” would be that kind of interaction. As I feel this from me-in a pathological process, what a relief that “stop” would be to me! Someone caring, someone there, someone real, someone that knows I am trapped in this running process, someone knows I still exist, this running on is not all I am, many many meanings of this kind, together, carried forward implicitly. A breath.

“ストップ”と言うことで相手を訪れ、相手に届こうとしているあなたは、その種の相互作用そのものです。病理的プロセスのなかにいる私にこのことが感じられるときには、その“停止”は私のなかにとても安心をもたらすでしょう！　誰かがケアしてくれている､誰かがそこにいる、リアルな誰かがいる、自分がこの止まらないプロセス（this running process）のなかにはめ込まれていることを理解してくれている誰かがいる、自分がいまも存在していることを知っている誰かがいる、この止まらないことが自分のすべてではないことを知っていて、自分のなかには多くの多くの意味があり、暗在的に推進されている、ということを知っている誰かがいてくれる。ああー（深いため息）。

――この手紙の最後で、ジェンドリンは、彼自身を病理的なプロセスのなかにいる人に見立てて、私の言う「治療的停止」が有効に機能する瞬間を描写しようとしている。ニューヨークでのワークショップで、高齢の彼がセラピー面接のデモンストレーションを披露してくれたことに私は驚いたが、振り返ってみれば、かつて来日した時（村山、1991）にも彼はこうしたデモンストレーションを行うことにとても積極的だったし、ジェンドリンの師ロジャーズもまた80歳を越えて来日したワークショップでセラピーのデモンストレーションを見せてくれていた（畠瀬ほか、1986）。

しかし、自分をクライアントの側に見立てて表現するようなこのような描写は、おそらくロジャーズと言えどもそう容易にできることではなかったのではないか。ここには、ジェンドリンのきわめて豊かなクライアントへの共感的な想像力が端的に表されていると言えよう。

この表現に触れたとき、私のなかには、自分がクライアントの人たちに（ことに困難で重症なケースにおいて）セラピーのなかで体験してもらいたいと思っている事象が、私自身が言語化できるレベルをはるかに超えて的確に描写されている、と感じざるを得なかった。最後の深いため息は、身体的な共鳴として、私自身のなかでも深く、深く生起した。――

This is a very beautiful thing, which you brought, if I understood you correctly.

Greetings from Gene

あなたがもたらしてくれたもの、もしも私があなたのことを正確に理解しているならば、これはとてもすばらしいものです。

敬具　ジーンより

４．おわりに

以上がジェンドリンから届いた手紙である。この手紙とそこに込められたメッセージは、私の中に言葉にならないほどの推進と、実践や臨床における新たな秩序形成の実感をもたらしてくれた。これは、ジェンドリンによる応答と相互作用が私の中に創造した応答的秩序の紛れもない実例（IOFI: instance of itself）(Gendlin, 1962a) である、と私は感じている。

＜文　　献＞

Gendlin, E.T. (1962a). *Experiencing and the creation of meaning: A philosophical and psychological approach to the subjective*. New York: Free Press of Glencoe. Reprinted by Macmillan, 1970.　筒井健雄訳 (1993)『体験過程と意味の創造』ぶっく東京

Gendlin, E.T. (1962b). Client-centered developments and work with schizophrenics. *Journal of Counseling Psychology*, 9 (3), 205-212.

Gendlin, E.T. (1963). Subverbal communication and therapist expressivity: Trends in client-centered therapy with schizophrenics. *Journal of Existential Psychiatry*, 4(14), 105-120.　村瀬孝雄訳 (1981)『体験過程と心理療法』ナツメ社　所収

Gendlin, E.T. (1964). A theory of personality change. In P. Worchel & D. Byrne (Eds.), *Personality change*, 100-148. New York: John Wiley and Sons.　村瀬孝雄訳 (1981)『体験過程と心理療法』ナツメ社　所収

Gendlin, E. T. (1981). *Focusing*. New York: Bantam Books.　村山正治・都留春夫・村瀬孝雄訳 (1982)『フォーカシング』福村出版

Gendlin, E. T. (1996). *Focusing-oriented psychotherapy: A manual of the experiential method*. New York: Guilford Press.　村瀬孝雄・池見陽・日笠摩子監訳 (1998)『フォーカシング指向心理療法』金剛出版

Gendlin, E.T. (1997a). *A process model*. New York: The Focusing Institute.

Gendlin, E.T. (1997b). The responsive order: A new empiricism. *Man and World*, 30(3), 383-411.
斎藤浩文訳（1998）応答の秩序―新しい経験主義―　現代思想 26(1)（特集：ウィトゲンシュタイン）172-201

畠瀬直子ほか編（1986）『カール・ロジャーズとともに』創元社

村山正治編（1991）『フォーカシング・セミナー』福村出版

Rogers, C.R., Gendlin, E.T., Kiesler, D.J. & Truax, C.B. (Eds.) (1967). *The therapeutic relationship and its impact: A study of psychotherapy with schizophrenics*. Madison: University of Wisconsin Press.

＜注１＞このプレゼンテーションの内容は、Suetake, Y. (2009). The Significance of Gendlin's A Process Model. *Person-Centered and Experiential Psychotherapies*, vol.8(in press). に掲載予定である。また、その内容の一部は、諸富祥彦編 2009『フォーカシングの原点とその臨床的展開』岩崎学術出版社（印刷中）を参照。